へ14 2691 3
へ14 2691 2
へ14 2691 1

へ14
2691
1

へ14 特
2691

坂東彦三郎一流初編上の巻

芳川周
その本類
同延亟

為鮮堂
梓

近世の俳優中奈落の底そゞ深き具負を受其名を擅と共ゐ高うせ〜も多なれど真ゐ大極上上吉兼るの評を下さぎ蓋〜此坂東彦三郎にして其技藝の巧且妙ある已ゐ當世名人の知る所なれば今更我輩が長口上を俟ぎ〜て新富座の瓦斯燈よりも明らかなり而〜て其一世の事跡も亦自らら別欄と〜て記さべき事多〜既ゐ口碑ゐ傳ふる如く彼横濱の一豪商が我い天下の何某なりと自負せ〜に對〜我い日本一の彦三郎云々と即坐ゐ和先まツくら馬の増長坊が鼻を挫き為るゞ自らふ尋常の俳優と異ある氣象を具へたる其顛末城聞がまゐく写〜取る此冊子の外題さへ其語を其まゝ倭一流ひく手も強き綱島が需めゐ應じて紋所の鶴ら千年亀藏ゞ斯も仕迎〜丹精を尚万代も傳へんと先い其気で書子にあん

明治十三年四月初旬

岡本起泉題

五代目坂東彦三郎
仁木彈正ふ扮装

彦三郎門弟
築地の善次

○あやめ
軒を並べる
東の
郭の
中橋の
大
▲節句を
男児遊ハ
弥さらふ衣服
もてれて遊ぶ
と菖蒲叩
きや
◐あやめ引きり
兜と袴着ふ
被ヒモ
大刀と鎧
鎧兜の
賑
きしく互ひふ
被家の懐と
笑ひ人ふ向つて自慢する
親の吹聴にのぐ
腹ふ悪ふ
せ帰る一人の子供ハ
年比澎やく
次へ
親と飾ら
茂世と子供
と拍びの
の家ぢハ
入りも
被
家
先

つぎ六ツセウ
身形いきーとる新
容の姿ーとらあが
戸口とら母さん話ふ大きな
新を買てあんれと注新ーつねる子とうハ
ねぐとらる母のむい尚つぐく才、たたぢやと
いそんとせーがあひ出ーと服ふ角立て
エて又あてもそん女事とりあとせざとある
成間見さんふ買て買ふと人を附と出嬢の
円で何うしてあと
ほとう新ぶがえと
ぜう付らを
ぜひ
是那由注新
あーかし
空箱の
陽に
飾屋
ある懶
の新
ふ

紙懶がある
でいるの外へ
花びふ出わび
こそ紙付る
物も欲ざる
のぞやモウ外へ
ぜーらせ夜招に
つぐ〳〵ぜう何う掃りで
遊びある与倭新つくぐ
母へあひふあるうてる涙のことを
掃り言出義よ帝ぐぐ
長が
ひの
揚句
去年
亡られ
とと義ど
不新合の
生上ふ何をよ
女の子一ツ長男の
勘吉へ今年十二ツと形態
なケハ一人おでも生ぐ中々ま助けと

つき
いふ沢
相應の親
助
辻番
昔ハものをとゝへ
いかさま
迎と見早

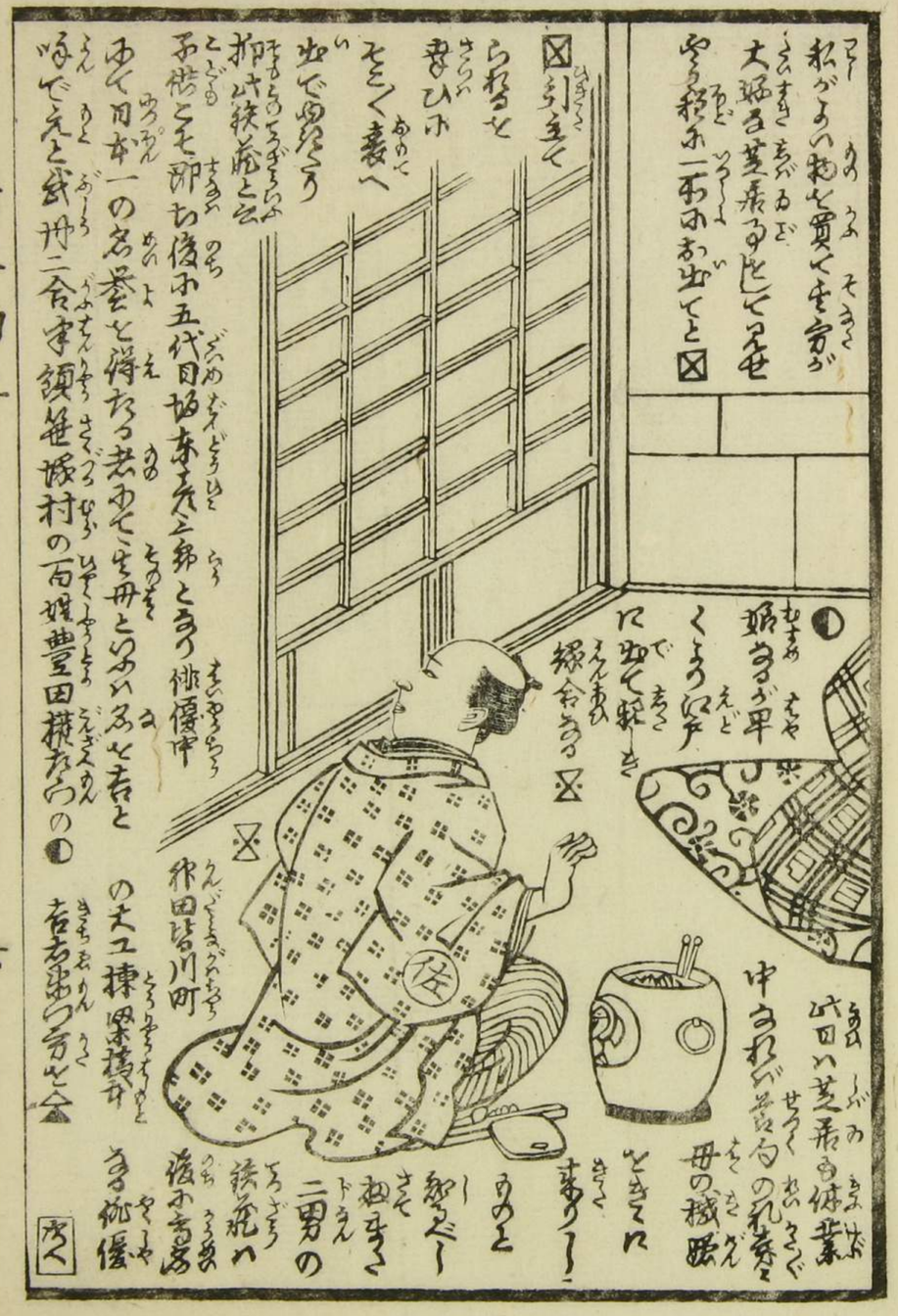
酒
西駅
彦
鉄
乳母日傘で
ト
ホレニ
涙の華
月と雲
あや
め
華
次へ

つゞき 態と
あるくる門口
と押明るぶ
ら河冊さん
今日はお用
出とうと入
来

いま迄長男の勘右衛
門殿の潤ゆせを泛して
つゞくる爲の鉄瓶をとて
オ又何ら叱られて大きな
形にて外宮のもの
今日はお言白たさうく

◆偽り或る大名の奥勤
を世ゞ仔細あるて眼と
あり〜後不学〜〜
縁で構ふの不分
ある糸構はれの大工
義五郎方へ嫁つ迄若なるが
不幸はて家ふ吻ふれ
なる法外に立別じ
長男の勘右衛門閑既
ふ堀町の或る狂言作
者の弟子と
あり生方へ
迷惑しが

私がよい物を買て来る方が
大坂名芝居のことせ
やう程ふ一番ふお出てと



引立て
られるを
哀ひふ
そこく表へ
出で出るこう
抑ハ鉄瓶とは
不思議と邪ふ後ふ五代目坂東三郎と名乗り俳優中
ゆて日本一の名誉を得たる者ゆて生母とのあいだを去と
呼で元と武州二合半領笹塚村の百姓豊田横右衛門の

◐姫ゆるゞ早くこう江戸に出て軽き縁合ある

◐武田い芝居の俳業中ゆれゞ若名の孔雀丹の機略

作田皆川町の大工棟梁横右衛門

ときこれ
まりー〜
のと
知ゞ〜
ねまく
二男の
鉄瓶ハ
後ふ高名
なる俳優

つゞき

ゑもの欲べんを給あつて日ハ秋葉伎ばなを好ミ
一寸あるる花びらの芝居の芝ばかりする
遅々年とゝ小伝ハ蔵ハ蔵ハ嫌
隅町の芝居奥ゑ行中ハ
日毎の楽ハ見ゑ
つゝて乗物へハ
迎ゑ麻布番ず
小生芝居
ゑ見物しゑ
ゑ見の出ハ
ゑ見の出ハ
河の仕ゑ
ゑ見人ゑ
落ゑて

図 ゑ見しゑ生ひ出の利物とのゑ
坂東彦三郎ゑ分ゑの佐十郎（彦三郎）と
いゑ玉つゝ小頭記ゑ鉄花ゑ我ゑ
如く愛物ゑ花ゑ
ゑ見ゑ
ゑ見ゑ
ゑ見

ゐゐゞドッとゐゐりに
ゐゐ甘いくと
ゐゐ義ゞゐゐハ笑ひも
ゐゐ眼をゐゐ
ゐゐの
ゐゐ
ゐゐ
ゐゐ

つゞき
まうまゝ
兄の勘左衛門と京げ
同座
て母のお吉うえ
赴き妻細のみと
咲せーにお吉も
愛嬢の中で
折角長きまで
身のためと
あつべ駅
父の
※
大工ふ
でも
安
乗る
方が
と思にも
永和を
きんと

育てあげ
むさく
化人へ
せーが四代勝吉に
一族狂歌へ
よくあのと佐十郎
作田の踏み方へ
先ぶれ業忙しふ
好出て行いざしも久
しう吉伝が
実に素じてあこの
事にお吉に
尾うーと生後の
つゞき侠花

(購永)

芳川春濤閣
其名も高橋毒婦のお傳 岡本起泉綴
東京奇聞 七編 切

芳川春濤閣
島田一郎梅雨日記 五編 切
岡本起泉綴

芳川春濤閣
白菖阿鼠顛末 三編 切
岡本起泉綴

御所桜梅松錄 十五編 近出板

命養生善惡鏡 折本 一冊

單語圖解 折本 一冊

太功記銘々傳 四冊

徳川年代鑑 折本 一冊

亀地本錦繪問屋

麹町區壹番町六十番地
編輯人 岡本勘造
淺草區瓦町十二番地
出版人 網島亀吉

へ14
2691
2

へ14
2691
2

物編

坂東彦三郎 優

一流中巻

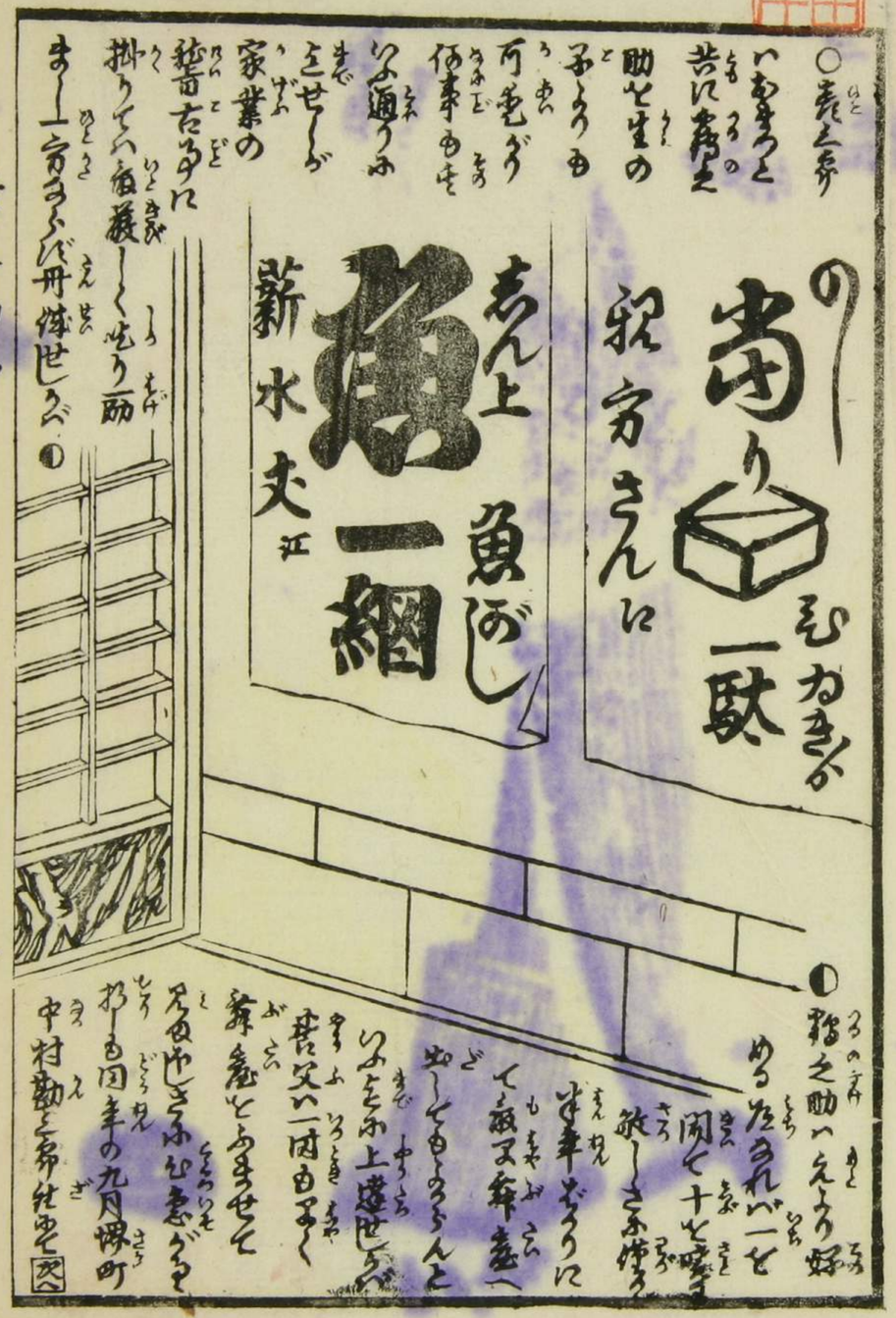
菊川豊濤 閲

葛飾北斎 画

揚州周延画

島鮮堂 壽梓

彦三郎中

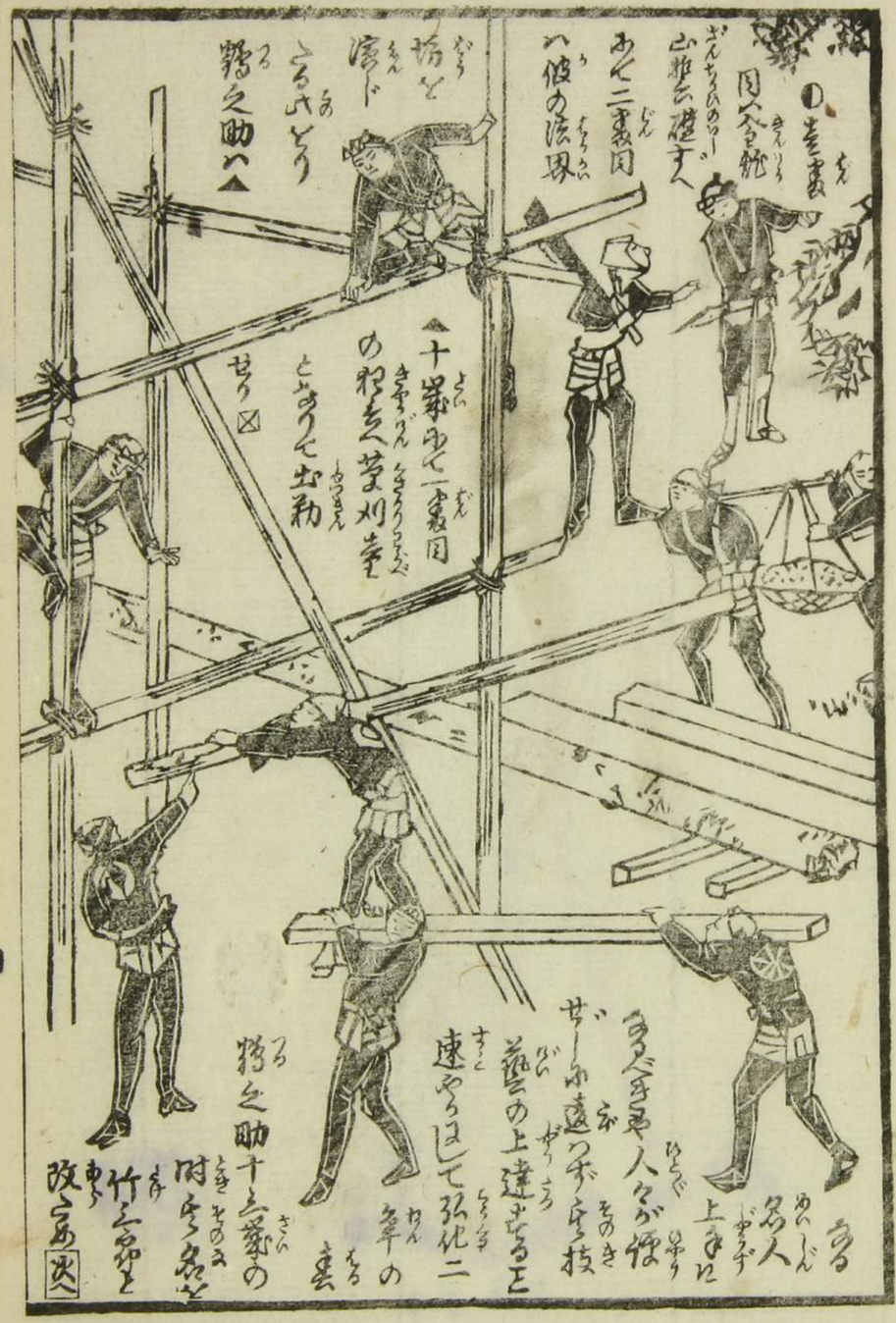


◐生近傍
横二丁堅四丁
焼打比べ公儀ハ
市中へ移る人実の頃を
自然非常の
の
鶴
鉄改め鶴之助
の
外ハ
ハ変くと
ハ更ホ
ハ変
ハ
ハ
ハ

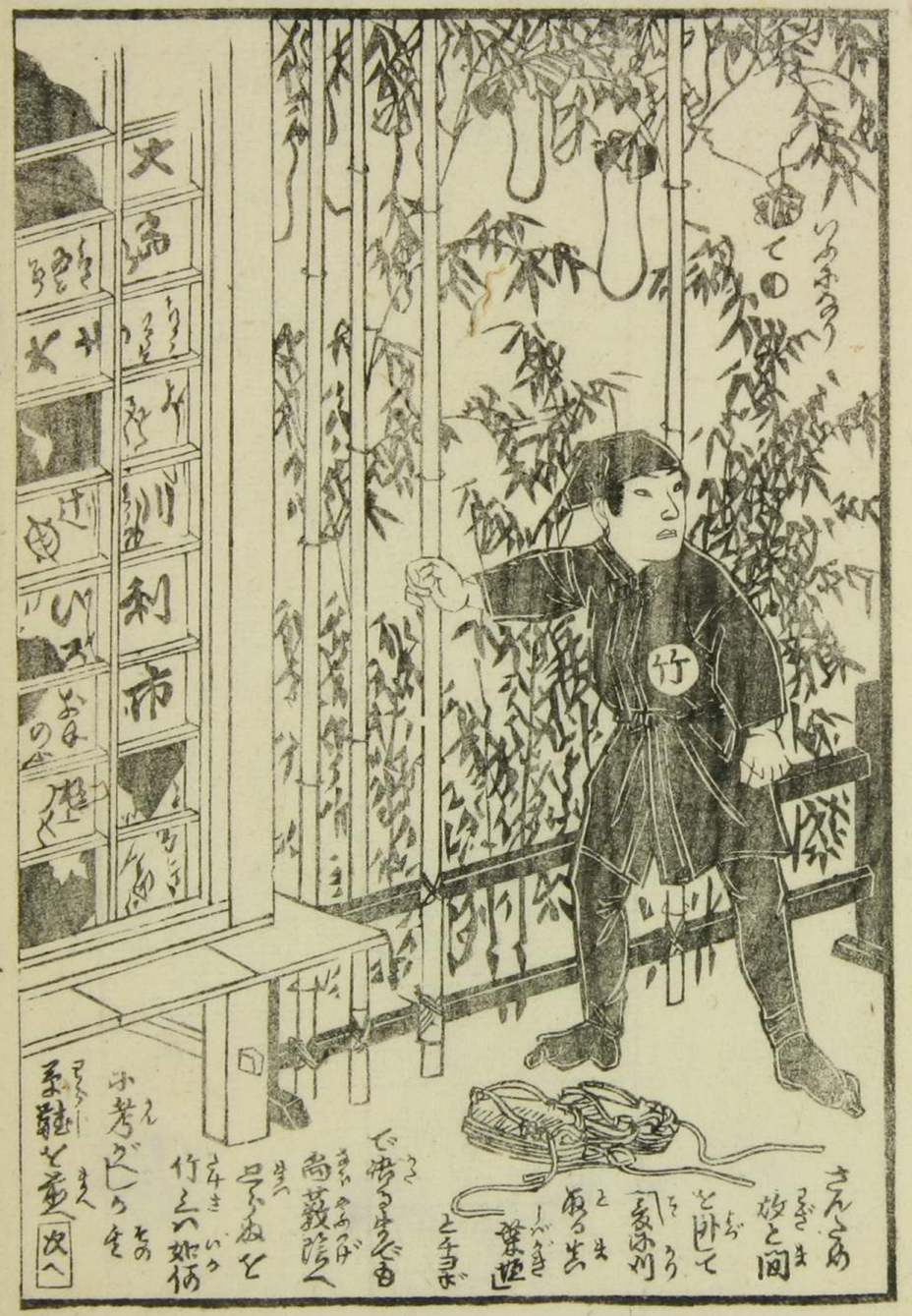
つゞき
下座敷
絵と絵地は
下さる日
因業い
残らぬを
地へ引張る
べゝと云遣
一同い
敷居を
跨ぐと
ひゞ編
俳句傷
即ち
今の猿若町
のこゝと聞き
を十丁目へ中村
座の樽と上
六月はじて
九月の末は
蔓延
白
又同じく
◎全く出来
上じゃ

所と吻やうど
結にきゝる
事なれば
別る者い食と雅生涯といふが中く
本氏ぶるも一同ぶ遊びの眉と苦ふ
セと
を所ある藪と間き五と崩
沈と詰め地形ふしも悉ぐが
きに出方の者や社附の家屋の
之人い更ゑり初義な俳優苦ス
お変り車ちゃふ紙とる中
何ぐも早く仕上んと
一同ぶカと合せて働らきしゞ
の外ふ仕事も遊ぶ◐

つゞき
十月十五日ハ
二番目の森蔵ハ
八所ハ
今ハ


二番目
あと二番目
ハ彼の法界
十郎ハ一番目
の和左ハ芝刈
と出勢
弥之助ハ

松本幸四郎


竹

つぎ 金さま〻紙藪巻と
頭りにがサくと振動し
居さる手間に御やく

☒ 幸は弟が
まて来ル筆
蓋へ拝ひ見
ゑ間の外

見物のこゝろ
対つて見功者な
見物いふる狂奥ぶい
竹藪ゝゝ文の男が出る

○蓋屋の
丁供

○先代
萩の仁
本蓋屋
堀

嫁の
八重垣

の全

役者

☒ 式者の
繼宮八幡宮
及び名とりし
紙数同じ三幸
結婚祝とい

みん我ら無んでも
那佐のかサくへ
ある姿ゝゝ
流石へ
る羅紗ざけ
様く仙と月あ
しと幸は弟をちく
褒めあひしゝ幸は弟へ
きさ竹之の姫才に浄く
感ゝ兄さへ（義経の事）
大層な恐ゝ和と
せゝ私へ姫ゝ所ゝ
晋董拝へゝ兄ゝ

招ぎれ義経
ゑ女桜の紅
盛小

初めに
一点の
中しゝ
ゝ
ゝ功
若連へ
ゝ功者
達者の俳優
達さへ古と
浦世坊ゝ

次へ

つゞき

扨て竹之介十五歳と成り十一月吉日☒☒☒
の長女お菊といふ即ち人の上年の
菊五郎が実の姉なれば団
十郎二八の表
丁度二八の表
竹之介は此時十八才
身丈の長
より先き
見の勘右
又右衛門
さて新内の
仮名の列に入り
その名を村冠二
と改め猿若町の

▲和べき風情なれど長と成嫁
とても和しうふと人と成て
申し合せ示線伝由紙示手をもつて
吉田と撰て海賊風用出発

◎なるべく四方小郷首くと
見せる貴父母の勝びい

何か御ん揉もあいくい
飯お華ぢれば妻を持
亀初森の新を
勘太改め冠二
ふんのとまるらまへと
怒が出て地妙地と
縁女を撰ましに☒

従ひ初めーい☒

辺ろ小家と撰へ
母のお春と引
取りてお撰と
いふ妻と迎へ
夫婦睦まじく
母お春は
と
のそう外之
も祈く同音
紙見ま屋くむ
とつける程ふお春は
次第の吉芳に引
久今はいも心祝ふ

次へ

東海道
つゞき
何不自由
のこる二人の
子供が題々小世
小家出るなん
てふ
◐菩提寺に名を所三
小濃り自分い
慈菩と改名
一即ち林三郎
が五代目
坂東
彦三郎と
一八実ハ
安政
四年
の事あて此年二十月の

◐長閑く
義長と
逆ある内に
なさ
出こゝる
出五郎とゝの
義長の由◐
市村座ゆゑ牛若お芳
の役を勧め狂言中改
名拔
の雲河と
迷ひ
奇羽屋く
の彩筒外
東海道
小濃の
夷長崎の果ものゝ
ちとあの付りあり
弁ハ
の俳優のこゝ上方へ
と
◐菩提寺に名を所三
小濃り自分い
慈菩と改名
一即ち林三郎
が五代目
坂東
彦三郎と
一八実ハ
安政
四年
の事あて此年二十月の

東京區分繪圖全　鹿兒島紀事六冊　切

命之養生善惡鏡全　島田一郎梅雨日記五編大尾

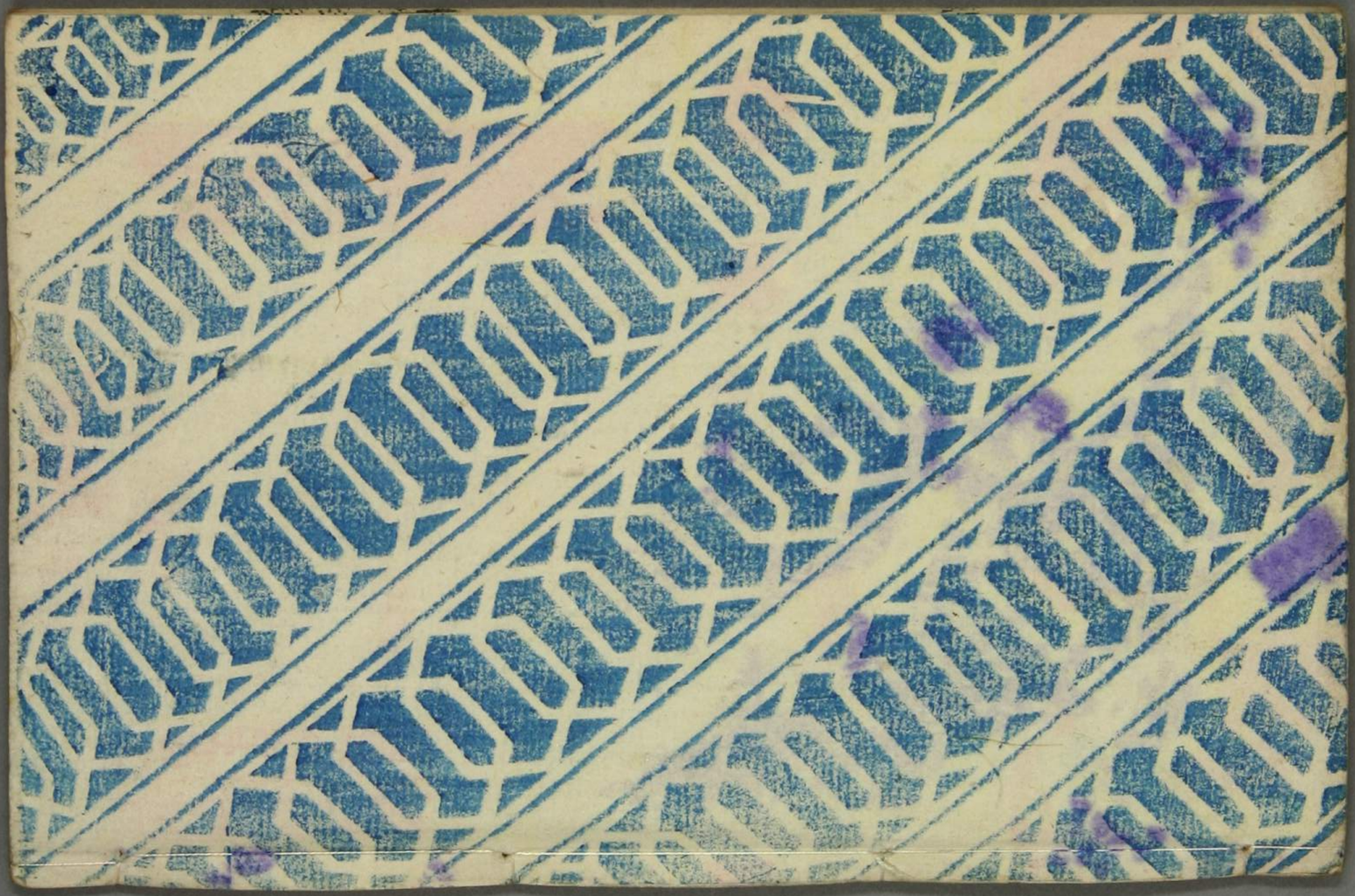
珍笑 寿々郎〜一 五扁 出板 彩色入小本數品

御所櫻梅松錄 忠臣藏折本 御優忠臣藏折本

大功記銘々傳四冊 新板双〜顔品

麹町區壱番丁壱七番地
編輯人 岡本勘造
浅草區瓦町十二番地
出板人 鶴島亀吉

亀地錦絵本問屋



へ14
2691
3

2691
3

彦三初下
彦三初下

つき 表さき夫婦いわひの付ひと
ゑこび家職はしく業ようち一人の
男の児さん後けの年の五月晴れ
て夫婦と喜ぶ家こせ宋しさん
むにかゝる漂めて
きり月とて飲る
酒あるまゝ
ぢも安政
二年の

◐ 商帰らやうまれば尾ふ ※ あゝべ智とろう又ハ嫁ふ
まゝんと既ふ縁りの黒髪 あとやりこゝろふと祝ふ兼と
心利く孫の乳母とそんなお魏
ふ勤
めき
れど
いろ
う肯
を猫
い勤め
そしてあと
私西ゑをしと
作せるあの

◐ 秋さん
過て推袖ふも
かゝる酒屋のあと

ふ十月初ふ
表ちゃん
ふの
ふかる

◐ 醫業論も市し
ふく市々の湯
茶ふと強共
ふ遂ふ果敢
ふく家ろれば家内
の慈傷大家ふ
中ふの糸が黄きの紙に眠も
あてられ泥けりふと共に和んと
とふき世と人々ぶ慰さめ ◐

ぎろん
表ろう
源き
解
めと
ふ大
金と
費しと紙
はてふろと
西瓜ふ無と
受ぶぶぶと
そんな不安
ふ
あまぐろら美化女と代作
生涯寡婦ふとろる
不安放相意な縁侯も ※
あまが 次へ

つぎ　あるものがたりの事

医家と生まれし児の

大いず

不育であげ上れ

のあるとつぎ

と呼ばれしは

あるのを産まれて

そんな事をいわず

いれる

あと附添いの上

方の船入り再びそれも生産はして

兎角小亡夫の墓まれそうお嫁入先に来ると

聲と上て因縁のある中乳母や下婢が

※一寸あとにうつる

上野みやう世

ある美人の男

の上に義が

用事一と事て

ある数一段いえ

てあるぬと信が

世事まもなく嬢の様子毎日

ちゃくちゃくと拵べさせ不安無

世見あり故さらに新しいあれなが

まもなくうらうらぞ新世を信仰一家

世見あるとりの尾ふりて

下婢も乳母も喜ぶ

おうて他人と慰さめる世間話しの中に

今然物めて登りて来さに戸の俄傍坂東

者三弟とのあい若もあるぶり中々の

名人めてき長

何事人ぶりて長

の話ぶりで用と

つく様じゃぶどんな

男ふ元さの初め

とあるおうぶく年に

出入の女髪結お角とい

者佐と今時さんの作者

通り世況者三の話わい

たい〜さのよ ※

▲毛氏とも

お供と

と勧め

生まれたお祭い

あり進ぜねば

世と医

め下女

傍

の表

ホ保者

ときせん

と成当乳

ホ次八

つぎ 小厮と連れとお角が家内さまを中の茶屋へ赴き二間の接客あく見物せしに孝心の弟が所家の品格に移情し風と見るべき見る絵

▼亡き母に似たるかな

○まて冥し

ウツトリ見惚れる

○お角が早合点

そは何の頼りに艶咲つ

◇「初春風」と題す

あやめ人のわもあらう梅のかをと
ゆき嬉しきを比と時候い
外見ても生ぐ耳新らしく紀行文
唄の生、文句きえ人はつきされあつば
ホツと英恩まる時「引き寄せ」つこい意が
深世ろう紀しぶ意さ一寸一筆感恩感良と
唄よとわ艶の世絵ろホン二人のひもあらぶ
梅であの英香の嬉しそうとしとぶう

つゞき 後の縁を
そと 押開け
お志ゝ
ごゝにまをせうと
いひつゝ式部へ入り
来しゝ男人
ゝ如賢新の
お解ゝ舎者
あぐらお聽の表を

折ゝ先日お芝居
入りませんもろ芝居のお後の

表姉ひくる
ゝまでゞ亡きふれて
ゝ踊ふ
ゝ生

上の
の
今い
新い
勢る
外

ゝしさ
不測と
考ゝる縁
あゝ悲い
ゝ場元祖の

ゝふ
お取色ゝ
ゝの
とのひろ 絵腰を
進まも 形中して
失礼のやうでありますが
今い 芝居の芝嬢
ゝふ 見ゝ世間
彩ゝびのお嬢
扱ゝ何ぞゝ又
扱ゝ以前の事を
お聞き中せば
世間と 見ゝ
上ゝ
お茶だけ
必ずゝ
芝嬢ゝ来通ゝ

中七

名を
ゝまで
ゝ
ゝと
ゝふの八

再縁の
お勧
め

ゝ
ゝ
ゝ

熊
角
かん

つき
即坐ふ文をかうける
例うゝ角がモシ老嬢
さわ望がけふこまりソレ
先達て馬鹿さんが
特て居さ那の
中特と仇寝夜
にとまそろくと
ねごろうけると
お鶴い
顔でうけうごう成と
ふ短ふ書状り猪物の入義
と共に鶴ふ藤ふ泊さと働きごろて
出ふ立あごり接拶ふ角ごりとして兼て
角
龍
◐暮閉ふ

成田氏へ我出入情るど
変ひ色と昼ふ
後ーさと首尾根
事と任遠ど家角
どの中特と芸さと上寝夜の今ふ聖
ーふ弟世とるくウムそろごと仇ひさてりて出て
ふ世ふ芸ふ弟ふ面けふ出ふ遠
ふれど返事ふるひふ鶴ふ
来ふ保出と抜つけふ女ふ
居見物ふ出ふけ毎ふ芸ふ重ふ婦物と
成ふ角と鶴流ふ特さとひとふ出ふ
接拶さふふ成ふ鶴ふ芸ふ
特俳優ふられふ男ふひとふ方
三人ふ家
後ふ二階
の一下間に
お客り
邪ふ色ふと教別ふ
及ふ寝疾ふ俳ふ芸
うふふられど個
ふに寝て鶴ふ
今ふ昔ふ昔ふ芸
双紙ふ芸居にふる方ふ
ふ成ふ奴ふを彩んで
実ふ出ふ世ふと立ふて
ふ芸ふ上ふ方
ふ成ふ芸居ふ物ふ
上ふ出ふ芸ふ嬢ふ
龍
角

難波橋

芳川春濤閲
其名も高橋
毒婦のお傳
岡本起泉編
東京奇聞 七編 十五編 近出板

芳川春濤閲
岡本起泉編
島田一郎梅雨日記 五編 切

芳川春濤閲
岡本起泉編
白菖阿鼻顛末 三編 切

太功記銘々傳 四冊

御所櫻梅松録 十五編 近出板

命養生善悪鏡 折本 一冊

單語圖解 折本 一冊

徳川年代鑑 折本 一冊

亀地錦絵問屋

麹町區壹番町六十番地
編輯人 岡本勘造
淺草區瓦町十二番地
出版人 綱島亀吉

坂東三十三所観音一流

芳川春濤校閲
岡本起泉編輯
揚洲周延圖畫

島鮮堂
壽梓

へ14
2691
1-3